

身体表現活動をコアとする保育カンファレンスの事例検討

○ 西 洋子 (東洋英和女学院大学)

I. 研究目的

近年、自分自身の保育を振り返ることで明日の保育をより豊かにする“省察”とともに、自分の保育を他者へと開く“保育カンファレンス”の重要性が提唱されている。個々の保育者は、“保育カンファレンス”を通して、自己の実践を他者に開くと同時に他者の考え方や他者の実践にふれることができ、こうした他者との豊かな交流を通して、自分の保育の特性や課題を再発見することができるのである。

本研究では、保育の現場が、子どもはもとより、保育者にとってもそれぞれが学びあい・育ちあう場となることを願い、東京都内の私立 T 幼稚園で行った保育カンファレンスを事例的に検討することを目的とする。T 幼稚園では例年、運動会を絵本を題材にして進め、プログラムのひとつとして、全園児が参加する身体表現あそびを行っている。2003 年度は、T 幼稚園の 6 名の保育者全員と研究者（筆者）が協働で、運動会の身体表現あそびにむけた保育活動を企画・実施した。今回の発表では、2003 年の 9～10 月に行った保育実践を紹介しながら、この実践を支えた 6 回の保育カンファレンスの記録や運動会後に実施した保育者への調査（自由記述）の検討を通して、身体表現をコアとする保育カンファレンスが、保育者にどのような気づきをもたらしたか、また保育者と研究者にどのような相互交流がみられたのかを中心に報告を行う。

II. 研究方法

①保育カンファレンスの日程及び内容

表 1 の日程及び内容で、保育カンファレンスを行った。なお、今回は、身体表現あそびをコアとすることから、毎回のカンファレンスでは話し合いに終始することなく、保育者と研究者が子どもたちの様子を思い描きながら、ともに動き表現しつつ意見交換を行ったり、新しいアイデアを練り上げる時間を設けた。

②保育者及び研究者

T 幼稚園の年少・年中・年長それぞれのクラスは、担任と副担任の 2 名の保育者で構成されている。保育者の経験年数は 2 年 2 名、3 年 1 名、3.5 年 1 名、5 年 1 名、7 年 1 名であった。研究者は、身体表現の実践・研究を専門とする。

表 1. 保育カンファレンスの日程及び内容

日程	内容
7/31	運動会のテーマとなる絵本の選定を行う
9/1	研究者がリーダーとなり、お話のいろいろな場面を保育者が表現しながら各クラスの役割を決めていく
9/11	各クラスで研究者の言葉がけにより子どもと保育者が行った表現あそびを VTR に収録し、成果や課題を話し合う
9/22	各クラスで保育者の言葉がけにより子どもが行った表現あそびを VTR に収録し、成果や課題を話し合う
10/3	3 クラス合同での表現あそびを実施し、成果や課題を話し合う
11/6	運動会後にこれまでの活動を振り返り、成果や課題を話し合う

③保育カンファレンス及び調査の検討

毎回の保育カンファレンスでの話し合いの内容を記録した研究者のメモ、及び全カンファレンス終了後に保育者に実施した調査を事例的に検討する。調査内容の項目は、以下の表 2 に示すとおりである。


表 2. 全カンファレンス終了後の保育者への調査項目


No	調査項目
1	担任クラスの子どもたちについて、どんなことを感じたり考えたりしましたか
2	自分自身の子どもとのかかわりについて、どんなことを感じたり考えたりしましたか
3	他のクラスの子どもについて、どんなことを感じたり考えたりしましたか
4	他の保育者の援助について、どんなことを感じたり考えたりしましたか
5	自分自身が表現する体験を通して、どんなことを感じたり考えたりしましたか
6	研究者と子どもとのかかわりについて、どんなことを感じたり考えたりしましたか
7	毎回の話し合いや VTR を通して、どんなことを感じたり考えたりしましたか
8	運動会後の子どもたちの様子について「あきみつけた」の表現あそびと関連するエピソードがあれば、お書きください

III. 結果及び考察

① 保育実践：年少クラスの実践の一部を表 3 に示す。

表3. 年少クラスの保育実践（一部）

月/日	活動内容
7/31 (木)	運動会で取り上げる絵本についての話し合い 保育者より今年の題材を絵本『あきみつけた』にしたいとの発案があった。この絵本はストーリー性の少ないものなので、展開が少し不安であるという意見がだされる。9月初めに研究者がイメージにあった音楽をいくつか持参し、保育者自身が実際に表現活動を行ってみることとする。
9/1 (月)	保育者と研究者による表現活動 前回の話し合いをもとに、絵本のいろいろな場面を保育者が実際に表現してみる。その後の話し合いにより、それぞれのクラスは、年少：リス 年中：まつぼっくり 年長：葉っぱの表現あそびを主に行うこととする。
9/10 (水)	表現あそび：リスごっこ1回目（担任N先生） 「リスに変身して森におさんぽにいくよ」と子どもたちに言葉をかける。子どもは保育者を真似して、手のひらを頭にくっつけて歩く。（動き：ジャンプ・ちょこちょこ歩き）「家についたらお風呂はいつおねんねしようね」と話すと子ども寝る。静かになり落ち着く。5～10分で終了。 制作：「リスさんのごはんのどんぐりをつくらう」と新聞紙でどんぐりをつくり「明日食べようね」と明日の活動へとつなげる。
9/11 (木)	絵本の読み聞かせ：『あきみつけた』を読む（担任N先生） 表現あそび：リスごっこ2回目（研究者が担当） 「リスごっこの上手な西先生があそびにくるよ」というと「本当？」「西先生どこ？」と楽しみにしながら待っていた。体操をしている途中から西先生の登場。「なんだか西先生っておもしろそう」と子どもたちはじっとみつめていた。西先生が「大きい木に登ってみるよ、大きいどんぐりの木をみつけたよ」と、声をかけると、子どもの動きが大きく楽しくなっていた。「どんぐり、どこにあるかな、お友達の手の中にかくれているかもしれないよ」「どんぐり拾っていない子にわけてあげよう」とリス同士にかかわりをもたせるような声かけをしていた。3歳児でもいろいろなかわりがつくられていく。他にも「どんぐり何味」と声をかけると「チョコレート味、いちご味 苦い味」と様々な答えが返ってきた。  残った分は冷蔵庫にしまっておこうね」と声かけをすると、

	新聞のどんぐりを自ら一箇所に集めてくる。「お家について、リスさん寝ましょう。しっぽはどこについてるの・・・しっぽつぶれないように寝ようね」で、子どもたちは寝転んで、静かになる。それを2～3回繰り返した。「じゃ、リスさん、もうリスごっこおしまいでいい？」「だめ～」「あと、1回だけお散歩したら、おしまいにしていいい？」こうしてリスごっこが15～20分で終了 観察：拾ってきたどんぐりやくりを見て、秋の実りを感じる。 (以下：中略)
10/3 (金)	絵本の読み聞かせ：『大きくなりたい子リスのもぐ』『こならぼうやのぼうし』（N先生） 子どもたちは、「子なら」を「おなら？」と聞いて、何度も楽しげに笑う。しばらくして保育者は「みんながそう言うと思った」と語り、「こならどんぐり」の実物を子どもたちにみせる。その後・ホールに移動。合同で表現あそびを行う。 表現あそび：リスごっこ5回目（全園児で）  はじめての全体活動であったが、年少の子どもたちは、楽しそうに表現していた。子どもたちのために、リスの帽子（茶色の耳がついているもの）と、色とりどりのどんぐりが準備されていた。1回通して十分に満足し、クラスにもどる。 (以降、略)

② 保育者の気づき及び保育者と研究者の相互交流

6回のカンファレンスを通して、自己の実践を語ったりVTRを見ること等により、保育者は自分の保育を冷静に振り返ることができたことを記している。また、他の保育者からの意見に耳を傾け、さらに自分自身が表現する活動を通して、翌日からの実践を柔軟に練り直していく過程が確認された。さらに、カンファレンスを重ねることで、担任クラスの子どものもとより、園全体の子どもの様子を捉える視点が築かれ、担任クラスの子どもの発達もまた、より明確に把握されていった。一方、研究者は、保育者の気がかりな子どもへの対応の細やかさや、子どもの表現を発展させる環境への配慮から多くの事柄を学ぶことができ、保育者は、研究者の子どもの身体表現自体を促す言葉がけに、大きな刺激を受けたことを記しており、相互に有意義な交流がもてたとまとめられる。